

〈資 料〉

京都の和菓子店における包装紙の色彩に関する研究

Research on Color of Wrapping Paper in Japanese-style Confection Shop in Kyoto

板垣 あゆみ 奥田 紫乃*
(Ayumi ITAGAKI) (Shino OKUDA)

1. はじめに

現在、包装紙は商品を販売する際に不可欠な要素となり、持ち運ぶという便利性だけでなく商品の販売促進及び商品を説明するための重要な役割を担っている¹⁾。昔の包装紙は、それぞれの店舗で木版刷りされており、この仕事は住み込みの奉公の夜通しで行う仕事であった。現在のように包装紙に豊かな色彩が使用され始めたのは、10~20年前であり、その歴史は浅い。これは、印刷技術の発達、慶事・弔事での使い分け、デパート等での高い誘目性が必要とされたことが原因である。

京都は長年、都として栄え、御所をはじめ数多くの公家や社寺が存在している。そのため、献上品として古くから和菓子の文化が発達し、菓子職人たちは、季節の細やかな移行に合わせ菓子の彩り及び形を変化させ、日々の移ろいを表現してきた。また、かさねの色目が誕生した地でもあり、色彩への美意識が高い²⁾。

そこで本研究では、包装紙の色彩から、京都に根づく伝統及び文化を見出すことを目的として、京都の和菓子店の包装紙を収集し、その後、包装紙の色彩調査及び和菓子店の訪問調査を行った。

2. 包装紙の収集

ウェブサイト「京都の和菓子☆ドットコム³⁾」に掲載されている30店舗及び、書籍「京都 おつつみ手帖⁴⁾」に掲載されている17店舗の合計47店舗の包装紙を収集対象とした。収集する際、①代表銘菓、②包装紙の由来、③包装紙は複数あるのか、④包装紙の変更の有無の

4項目の質問を行った。

その結果、複数の包装紙を利用する店舗の中には、目的・商品・季節で使い分ける店舗があることが読み取れた。また、店舗創業年は、全体の約7割が1800年代以降に集中していたが、包装紙を用いる慣習は近年形成されたため、創業年との関連性は薄いと考えられる。

3. 色彩調査

視感測色及び色彩輝度計による2種の測色の色彩調査を行った。調査は、天井部に標準光源D₆₅の蛍光灯が8本設置された暗幕及び白布に囲まれた空間内で行った。机上面に無彩色N5.5のボードを設置し、机上面照度を1360lx~1370lxに設定した。図1に視感測色の様子を示す。

視感測色ではJIS標準色票(光沢版)を用い、測色可能な面積である145色を抽出して調査対象とした。色相、明度、彩度ごとの測定結果を図2に示す。色相Y



図1 視感測色の様子

同志社女子大学生生活科学部 2010年度卒業生
*同志社女子大学生生活科学部

京都の和菓子店における包装紙の色彩に関する研究

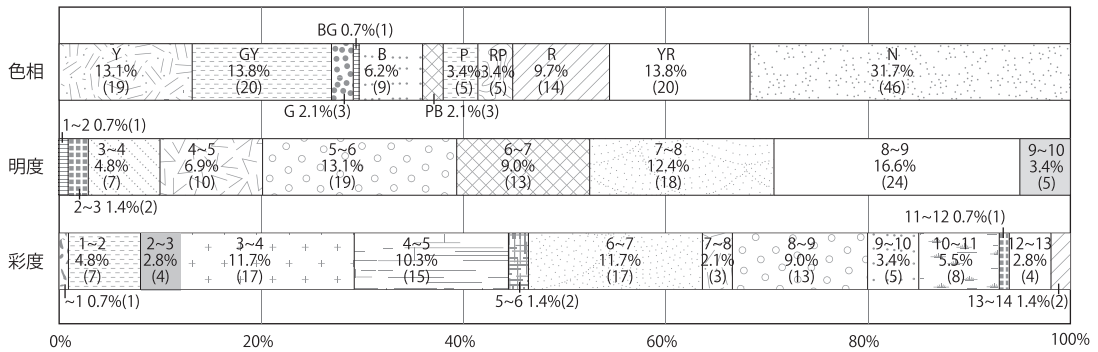


図2 視感測色の結果

が59色、色相Rが14色であったことから、暖色系の使用頻度が高いことが分かった。色相PBは、夏季限定の包装紙にのみ使われていることから、涼しさを感じさせるために使用されているのではないかと考えられる。よって、季節感が重要視されていると推察される。また、高明度の包装紙が多く、柔らかく落ち着いた印象を与え「和」の雰囲気を感じさせていることが読み取れた。

色彩輝度計による測色では、色彩輝度計(KONICA MINOLTA CS 100-A)を用い、測色可能な136色を抽出してそれぞれの包装紙の輝度及び色度を測定した。これより、包装紙の色はxy色度図のx軸0.235~0.531、y軸の0.287~0.446の範囲内に存在していることが明らかになった。

これらの測色結果から包装紙を以下の5グループに分類し、それぞれの特徴をとらえた。

「多数の色が使用される包装紙」では、複雑な模様が描かれている包装紙が多く、無彩色の背景色が頻繁に使用されている。図3に示す笹屋守栄の包装紙は彩り豊かで非常に目を引く。また、背景色が無彩色ではない場合でも、高明度・低彩度の背景色が使用され、模様をメインとする工夫がされている。

「落ち着いた色が使用される包装紙」では、昔ながらの包装紙を使い続ける店舗が多く、伝統を重んじる風潮が読み取れる。図4に示す包装紙を使用する水田玉雲堂は、創業1477年の老舗で、深緑と白のシンプルな配色の包装紙を昔から使用している。1種類の包装紙を長年使い続けることによって、包装紙を一見するだけで店舗が識別できる。また、包装紙から店舗を識別することは、包装紙に店舗の基調色を使用する店舗でも共通する。

視感測色において彩度8以上の背景色を示した包装紙

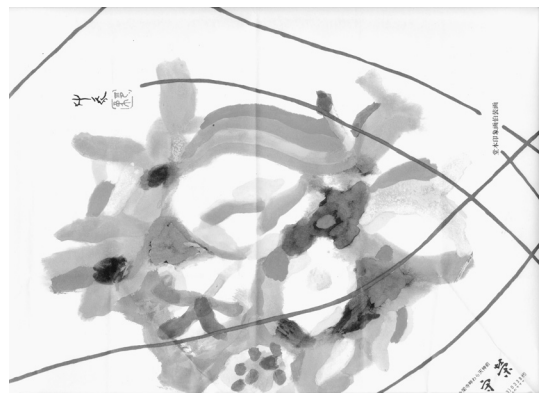


図3 笹屋守栄の包装紙

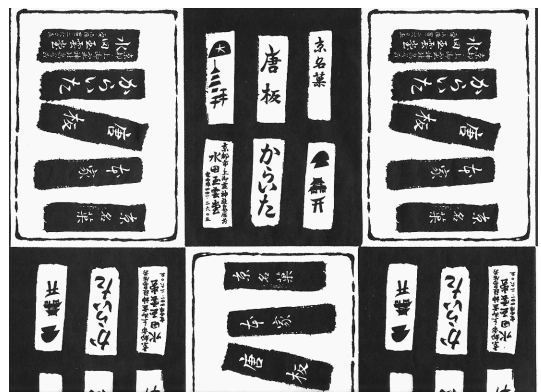


図4 水田玉雲堂の包装紙

を「背景色の彩度が高い包装紙」と分類したところ、11枚中9枚の包装紙で模様色に白が使用されていた。図5に示す亀屋陸奥の包装紙では10R 5.8/10の鮮やかな背景色に、白でイチヨウの葉をくわえた鶴が描かれている。

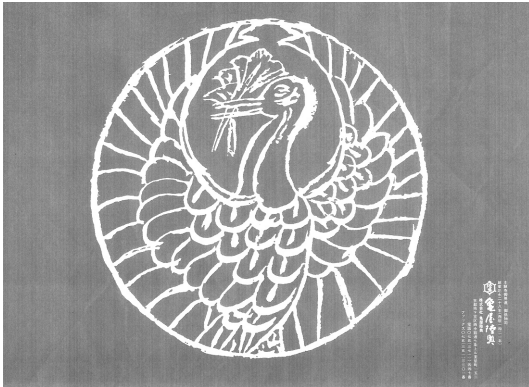


図5 亀屋陸奥の包装紙



図7 一文字和助の包装紙



図6 洛匠の包装紙



図8 豆政の包装紙

「京都の風景が描かれている包装紙」では、使用色にばらつきはあるが店舗所在地付近の寺社仏閣が描かれていることが多い。図6に示す包装紙を使用する洛匠は、高台寺参道のねねの道沿いに位置し、包装紙には付近の八坂塔が描かれている。また、寺社仏閣だけでなく情景が描かれている包装紙もある。図7に示す一文字和助の包装紙は、今宮神社で催されるやすらい祭の様子が描かれている。

「著名人によって描かれている包装紙」では、図8に示す豆政の包装紙や図3に示した笹屋守栄などが該当する。豆政の包装紙は、京都市出身の染色家である皆川泰蔵氏によって描かれ⁵⁾、笹屋守栄の包装紙は日本画家の堂本印象氏によって描かれた。商品だけでなく、包装紙にもこだわりをもつ店舗の特徴が読み取れる。

4. 和菓子店の訪問調査

包装紙を収集した際、包装紙をリニューアルしたこと

が明確であった7店舗のうち5店舗を訪問してヒアリング調査を行った。対象店舗は、俵屋吉富、かま八老舗、長久堂、豊松堂、京華堂利保である。質問項目は、①包装紙を何種類使用しているか、②包装紙に使われる色や模様によどのような意味があるか、③包装紙は過去にリニューアルされたか、④どのようなコンセプトをもって包装紙が考案されたか、⑤包装紙に店舗の特徴や京都らしさを表現する工夫はあるか、⑥進物用にはどのような対応をするか、の6項目である。

その結果、包装紙をリニューアルする理由は、先代により確立されたイメージからの脱却やコストの削減、流行の変化への対応など、店舗により異なっているが、店舗独自の「こだわり」に変化は見られなかった。俵屋吉富及び豊松堂では、それぞれの店舗名である俵や松の模様など、店舗に因んだ模様を使用することで独自の特徴を表現している。京華堂利保では、先々代によって考案された宝づくしの模様を近年復刻して使用している。考

案当初は朱色のみであったが、現在は青、黄緑、橙、茶の4色を加え、さらに掛け紐を数多く揃えることで、客の要望や季節、目的によって包装紙の色と掛け紐の色を組み変えている。かま八老舗及び長久堂では、店舗の基調色を使用することをこだわりとしていた。

また、京菓子の優れた伝統を後世に伝えるために23軒の京菓子店によって結成された「菓匠会」が存在すること^{6,7)}や、包装紙に漉し餡の製造過程で生成される小豆かすを漉き込むなど、昨今のエコ意識の向上が包装紙に影響を及ぼしていることがわかった。

5. おわりに

本研究の結果、包装紙から見る「京都らしさ」とは、高明度の配色や落ち着いた配色が好まれる点、季節感を重視する点、店舗独自のこだわりがある点の3点から明確にできるといえる。現在、販売促進を目的とする派手な包装紙が増加し、エコ意識の高まりによって包装の簡略化が進行している。しかし、本研究を通して、包装紙一枚一枚に意匠を凝らした配色美や長年受け継がれてきた伝統が息づいていることがわかった。包装紙を単なる包み紙と捉えるのではなく、店舗それぞれの歴史が刻まれた貴重なものとして捉え、それを残していく重要性を感じてほしい。

参考文献

- 1) 日本包装学会 編：包装の事典，2001. 6，朝倉書店
- 2) 井上由理子 著：老舗の味へおこしやす 京都の和菓子，2004. 4，学習研究社
- 3) 京都の和菓子☆ドットコム (<http://kyoto-wagashi.com/>)
- 4) 佐藤紅 編：京都おつつみ手帖，2006. 7，光村推古書院
- 5) 月刊京都 9月号，2010. 9，白川書院
- 6) 菓匠会記念誌委員会 編：菓匠会－記録・上菓子屋仲間から菓匠会まで－，1987. 11，菓匠会
- 7) 菓匠会記念誌部会 編：菓匠会百二十年周年記念誌（百周年からの歩み），2008. 3，菓匠会

謝辞

本研究のヒアリング調査において、俵屋吉富・かま八老舗・長久堂・豊松堂・京華堂利保の方々には多大なる協力を得た。また、日本特殊印刷株式会社より、菓匠会に関する資料を提供頂いた。ここに記して謝意を表します。

(2011年11月9日受理)